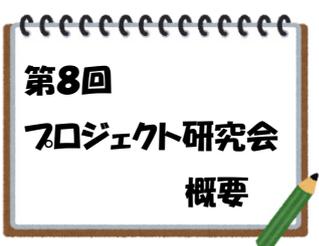


校内研究活性化プロジェクト研究通信

第15号 令和5年(2023年)12月22日発行

冬至を迎え、いよいよ年の瀬が押し迫ってまいりました。実践校のみなさまにおかれましては、新年を迎えるための準備にお忙しいことと思います。

プロ研通信第15号では、11月24日(金)に開催しました、第8回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。今回のプロジェクト研究会は、これまでの研修と各校での実践の往還から、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方について今一度考えました。また、第8回が本年度最後の研究会ということもあり、トータルアドバイザーである滋賀大学大学院教育学研究科 辻 延浩教授より、研究のまとめをしていただきました。



第8回プロジェクト研究会のめあて
「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう
校内研究のあり方を見いだそう!



第8回プロジェクト研究会の流れ	
1. 開会の挨拶	4. 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方
2. 質問紙調査の分析と報告 および研究のまとめ	5. 事務連絡
3. 各校の取組の分析	6. 本日の振り返り
	7. 閉会の挨拶

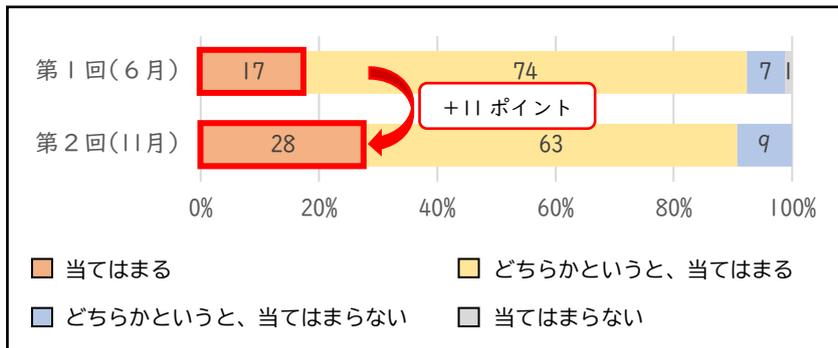
質問紙調査の分析と報告および研究のまとめ

11月に実施した第2回教員対象質問紙調査の回答を集計し、多くの設問でポイントの増加が見られました。それは研究委員のみなさんが「新たな教師の学びの姿」についてよく理解を深められ、理論に基づき、各校で創意工夫を凝らした実践をされてきたことが要因であることは間違いありません。プロジェクト研究会ではスライド資料を提示し、多くの設問について分析の報告をさせていただきました。プロ研通信では、プロ研通信第6号(9月11日発行)でお知らせした設問に合わせて教員対象質問紙調査から見える教員の変容をお伝えしたいと思います。

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92%	91%	58%
	+11ポイント	±0ポイント	+6ポイント

*令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回:91人 第2回:86人

①「児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる」の設問では、「当てはまる」という回答に11ポイントの増加が見られました。また、②「児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる」の設問では、肯定的な回答に増加は見られなかったものの、第1回と同様に90%を超える高い数値となりました。さらに、その中で「当てはまる」と回答した割合を見てみると11ポイント増加したことがわかりました(図1)。



これらのことから、校内研究を通じて実践校の先生方が「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実際に経験されたことで、具体的に児童生徒が個別最適、協働的に学ぶ姿をイメージできるようになったと考えました。

図1 「児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる」の回答の割合

「個別最適な学び」と「協働的な学び」のどちらも具体的にイメージできる先生が増えたこと、そして6月の時点で既に具体的にイメージはできていたけれど、指導につながられていなかった先生が理解を深めて実践し始められたことにより、児童生徒の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識して指導されている先生が増えたのだと考えました。

令和4年12月に中央教育審議会から示された答申に「教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる」と示されています。また、プロ研通信第14号で御紹介した、昨年度の実践校の校内研究主任が仰っていたように、「人が学ぶ」プロセスは大人も子どもも共通しているのですね。先生方が校内研究で経験された「個別最適な学び」と「協働的な学び」という学びを是非とも指導に生かしていただきたいです！



各校の取組の分析

研究委員のみなさんには、「新たな教師の学びの姿」の四つの側面、「主体的な姿勢」「継続的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」から、自校の校内研究の取組を振り返り、校内研究を「活性化させる要因」を書き出させていただきました。

図2は第3回プロジェクト研究会(7月7日に実施)の時にまとめたものです。それと今回まとめた図3を比べると、研究委員のみなさんが今年度の学びを生かした各校での実践を経て、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて具体的なイメージをもつことができるようになったことが分かります。

校内研究活性化のポイント

主体的な姿勢

- 自分の課題をきちんともっている。
- 具体的な生徒の課題を把握しているから、テーマを決められる。
- 小学校ではどう生かす？
- 同じように話してみれば、もっと似た解決法が出てきてよいのでは？
- (これまでの校内研究の流れを)知っている人がいるとよい。
- 先輩から気軽に「見に行こう」と声掛けができている雰囲気が良い。
- グループテーマを具体的にしているので話しやすい。
- 自校で同じように、夏休みにやってみようかな。

個別最適な学び

- 個人の学びをすごく大切にしている。
- そのことで、グループの学びをきちんと個人に返すことができている。
- 自分の失敗談を伝える中で、解決策を見いだすことができていた。
- 自分事として取り組める

継続的な学び

- 昨年度の課題を基に今年度の課題を決めている。
- 考えていることをみんなの前で宣言していきやすい！
- 学びに連続性がある。

協働的な学び

- テーマを練り上げる時間を十分に確保している。
- そのことで、同じ課題意識をもつことができている。
- グループ構成(年齢など)も工夫されている。
- このあと、どうまとめているのだろうか。

図2 第3回プロジェクト研究会(7月)で挙げられた活性化のポイント

主体的な姿勢

- 学級担任以外も自分事として
- 自分(教員一人ひとり)が中心となって進める
- グループテーマと個人テーマの設定
- 外部の先生から刺激をもらう
- 自分のめあてを引き出す
- 自ら学ぶ機会をつくる
- 参観する視座の明確化
- G-OJTグループの編制
- 短時間の会議
- 略案の作成

個別最適な学び

- めあて→学び→実践→振り返りのサイクル
- 自分の課題を基にグループ分けし、同じ課題をもつ人と協議できる
- 他者からのアドバイス
- 自分事として考えた授業
- 同じ授業を複数回する
- 生徒授業評価アンケート
- めあての共有と振り返りの時間の確保
- 一人しレポートの作成
- 強みと課題の把握

継続的な学び

- 定期開催
- 学びのサイクルの可視化
- 授業研究を1年間てバランスよく配置する
- 適切な振り返り(チームごとに)
- 継続的な話し合い活動
- 児童の学びのベースの統一
- G-OJTグループのメンバー固定
- 1年間どのように校内研究を進めていくか毎回確認
- 「えんたくんシート」を継続して活用
- めざす生徒像の把握→授業参観
- グループテーマを自分たちで決める

協働的な学び

- チームでの授業づくり
- ICTの活用
- 目指すゴールを共有する
- 全員が授業を参観できる
- 話し合える集団を増やす
- 授業の様子との交流
- 多くの先生の意見を聞くことができる
- いろいろなグループで対話する時間を設ける
- 職員間の考えを共有(改善点、うまくいったことなど)
- グループの協議の流れを固定した
- G-OJTで学びを深めた
- チームの先生への仕事割り振り、情報共有
- 仕組みづくり

図3 第8回プロジェクト研究会(11月)で挙げられた校内研究活性化の要因(当日の記録を基に作成)

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方

今年度のプロジェクト研究会での最後の協議では、研究委員のみなさんに『新たな教師の学びの姿』の実現に向かう校内研究のあり方とはどのようなものなのかについて一つの答えを出していただきました。次の写真(図4)が、各校の取組の分析から出てきた校内研究活性化の要因を基に図にまとめられたものです。

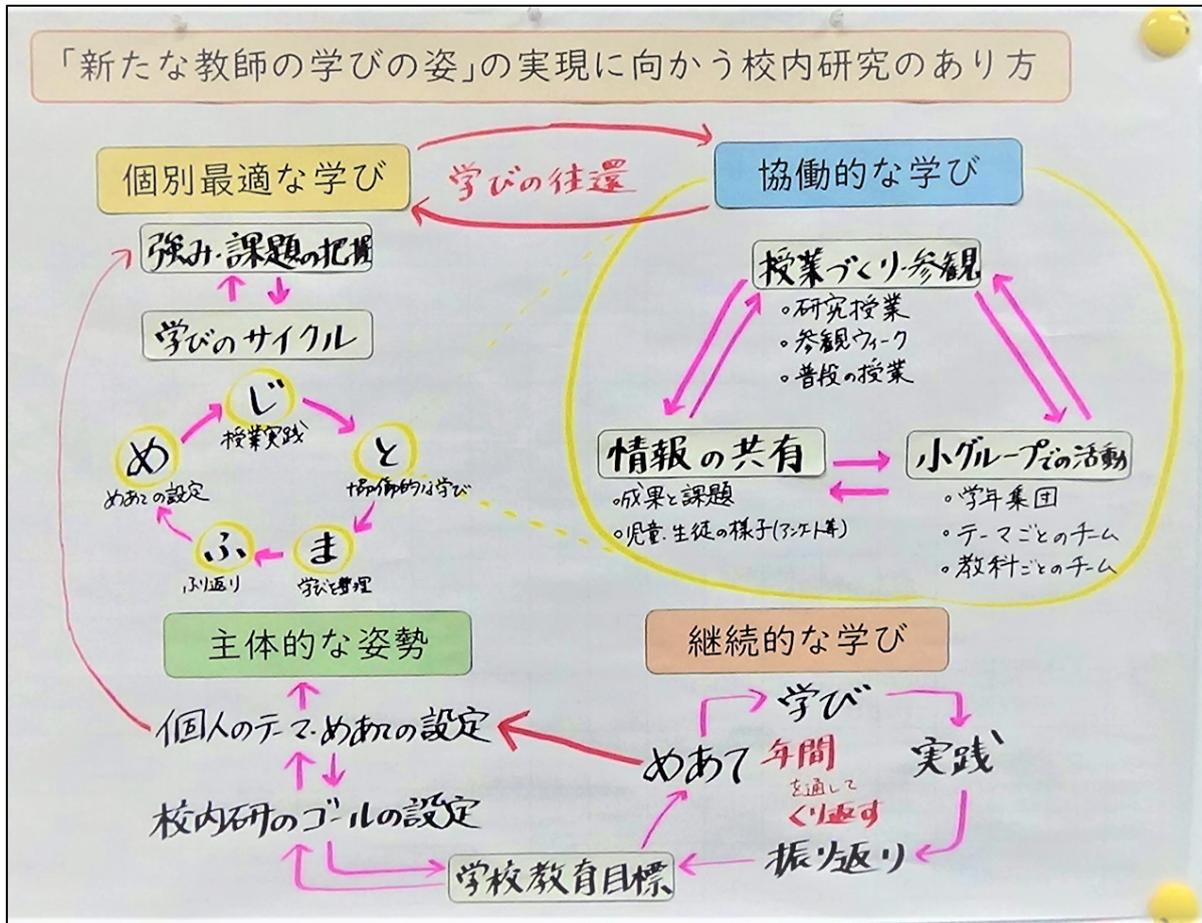


図4 研究委員のみなさんがまとめた「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方

研究委員のみなさんの様子(図5)からは、各校での実践の中で、御自身が校内研究主任として仕掛けたことや、自校の教員一人ひとりが学ぶ姿をイメージしながら、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究のあり方についてまとめていただいていることが伝わってきました。今日までに様々な取組を経て実践校の校内研究は、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究へと確実に向かってきました。それが偶然ではなく、研究委員のみなさんの取組の成果として現れたのだということを確信できる協議でした。

プロジェクト研究会は今回で最終回でしたが、各校の今年度の校内研究はまだ終わってわけではありません。今回まとめていただいたことを基に各校で実践していただくことで、校内研究がますます活性化していくことと思います。



図5 研究委員全員で考えをまとめる様子

滋賀大学大学院教育学研究科 教授 辻 延浩先生による研究の総括



滋賀大学大学院教育学研究科
教授 辻 延浩先生

1. 今年度の研究の特徴「研修と研究の一体化」

7月7日に開催された第3回校内研究活性化プロジェクト研究会において、今年度の研究の特徴として、「研修と研究の一体化」をあげました。「研修」とはこれまでの成果を学んで習得・活用することです。「研究」とはさらなる探究と成果を発信することと整理しました。11月14日第7回研究会では、それが見事に発揮されていたと思います。県内の校内研究主任を相手に、それぞれに取り組みされたプロジェクト研究の成果と課題を発表されていて、研究委員のみなさんにとっては、昨年度のプロジェク研究に学ぶという研修を足掛かりとして、自校の実態に合わせ、無理なくできるところからはじめ、さらに使いやすいようにアレンジし、小規模校または大規模校なりの新たな取組につなげるという研究的な実践を見て取ることができました。一方、研修に参加された県内小中学校の校内研究主任にとっては、昨年度と今年度において取り組まれた研究成果に学び、自分の学校に持ち帰り、一度試してみるという「研究と研修の関係」について学んでいただけたと実感しました。

2. 教師自身の学びや研修観の転換

「令和の日本型教育」を推進するための「新たな教師の学びの姿」として、子ども達の学びとともに教師自身の学びや研修観を転換することの必要性です。このことが校内研究にも当てはまり、従来の教職員全員が一堂に会して、一人の授業を見て、全体で討議するという形式からの脱却が求められています。若手、中堅、ベテランの枠を超えて、互いに教育観や授業観をぶつけ合う、そんな検討会にしていくためにはどうすればよいか、真剣に考える必要があります。その点において、今回の5校での取り組みでは、G-OJTや課題別グループを組織して、自己課題が探究できるグループワークを基本とする重要性が提案されていました。そのためのツールになったのが、昨年度に開発された「授業アップデートシート」や「共通実践レビューシート」などであり、大切なことは、それぞれの学校において、学校や子どもの実情に合わせて、主体的に改編されていることです。教師自らが主体的に校内研究に参加するためには、明確な目的意識をもつ必要があり、はじめはぼんやりしていても、グループで協働的に意見交流する中で、徐々に課題が鮮明になり、できるようになったことやまだまだ苦手なことが自己理解できること、このことが明日の授業につながるという、とてもシンプルなことが確認できました。

3. 校内研究主任の力の発揮どころ

課題別グループをつくるために、校内研究主任の力の発揮どころが明確になりました。何人のグループをいくつ作ればよいか。どのようなメンバー構成にすればよいか。課題別というけれども、その課題やテーマをどのように設定・集約するのかといった問題です。これらについては、小規模校と大規模校では状況は異なりますし、これといった明確な答えはないと思います。何を大切にしたいかによって分かれます。ただし、グループ協議において、メンターとメンティーの関係が構築できることが望まれるとともに、研究主任をサポートする組織体制が求められます。今後、学校のグループワークの基本的な考え方として成熟させていただくことを願います。

4. 研修、研究、教育の三位一体化

冒頭、「研修と研究の一体化」というキーワードをあげましたが、今回のプロジェクト研究とともに学ばせていただくなかで、「研修、研究、教育の三位一体化」のイメージを強く抱きました。「研修と研究」に加えて「教育」をそこに重ね合わせた理由は、研修も研究もどちらかといえば、教師教育、すなわち、校内研究主任と校内教員の力量形成というイメージがあります。何のために研修や研究をするのかといえば、子どもに良質な教育を施すこと、子どもの成長のためということ忘れてはいけません。「負担感」や「自己実現」の前に、確かな子どもの成長の姿があらわれる校内研究であってほしいと思います。

「教育」という視点を取り入れることの重要性に気付いたのは、Z中学校の、教科の指導と生徒指導を一体化させ、生徒指導の四つの視点から授業づくりを見直すという、まさに教育の視点から子どもの総合的な力を育むという取り組みです。新しい生徒指導提要の四つの視点は、教科の指導においても重要視されるべき視点であり、子どもを真ん中においたとき、生徒指導の内容と教科の内容がしっかりと関連付けられていれば、生徒にとってはわかりやすく、取り組みやすい、逆に教師にとっても指導しやすく、教員間の連携も図りやすいことに繋がります。是非とも県内の学校に広げてほしいと願います。

研究委員のみなさんの振り返り

○第8回プロジェクト研究会の振り返り

- ・今年度の校内研究を振り返り、次年度に向けての成果と課題を見直すことができました。どの取組や学びも全てつながっていて、必要なことだということが確認できました。今後、スムーズに進められ、参加しやすい校内研究になるようにコーディネートすることが私たちの役割だと再確認できました。
- ・自校の校内研究を振り返って、新たな教師の四つの学びの姿という視点を基にして、現状、よいところと改善するべきところが明確になりました。「主体的な姿勢」「個別最適な学び」他校の先生の実践も改めてうかがって(「協働的な学び」)、自校にも取り入れたい(「継続的な学び」)と思いました。
- ・自分ができていなかったことを他校の先生方と共有することができました。次年度の校内研究につなげていきたいと思います。
- ・4人の研究委員の先生方と共に、校内研究のあり方について協議しながら考えることができました。自校での取組にも「新たな教師の学びの姿」につながっているところが多くあることが分かりました。
- ・1年間の自校の校内研究の取組を「新たな教師の学びの姿」で振り返り、自分たちがやってきたことを価値付けすることができました。また、他校の取組を聞いて自分ができていないことも分かり、来年度の校内研究の計画に取り入れていきたいと思いました。

○第8回プロジェクト研究会での学びを自校の校内研究会でどのように生かしたいですか

- ・今年度の校内研究をまとめ、来年度の方向性を決める時に、今日のアンケート(質問紙調査)の結果等も踏まえ、進めていきたいと思います。
- ・自校の先生が校内研究にめあてをもって参加できていない部分があるということが分かりました。事前にしっかりとめあてを確認する時間を取るようにしたいです。また、適切なタイミングで外部の先生から刺激を得たり、その他の学びの場を作ったりしたいです。
- ・今年度、自分に足りなかった「個別最適な学び」を実現するための方法を他校からも知ることができたので、利用できる場所はしたいです。特に、学びのサイクル(生徒と類似)を中心として、教師にもつなげていけたらと思いました。ありがとうございました。
- ・校内研究のあり方については、自校の教員でも同じように考える活動をとってもいいのかなと思いました。私が今日学んだことを紹介するだけでなく、自校の校内研究のあり方をみんなまで協議するのも面白いと思いました。
- ・生徒も先生も学びのサイクルがうまく回るように、今後もファシリテートしていきたいです。

第8回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回で、今年度予定していた全8回のプロジェクト研究会が終了しました。実践校の先生方、度々訪問をさせていただきありがとうございました。私たちの研究が、少しでも先生方のお役に立てたと思っていただければ幸いです。校内研究を通してたくさんの先生方と学ぶことができ、本当に楽しかったです。みなさんの学びの足跡を研究としてまとめさせていただきましたので、ぜひ2月9日(金)は総合教育センターにて研究発表を聞きに来てくださいね!また、研究委員のみなさんは、発表大会当日も、どうぞよろしくをお願いします!



研究員 いなます けいご 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥